

＝ 思いを込めて 3.11 ＝

出勤時、盲導犬を連れていらっしゃるご婦人を時々見かける。歩道の段差を知らせ、人や車の往来を察知し、安全に横断歩道を誘導する犬の姿には感動すら覚える。どうしてそんなことができるのだろうか。

盲導犬は、生まれて生後2カ月になるまでは、母犬のそばで兄弟姉妹と一緒に過ごし、その後、約10ヵ月間パピーウォーカーと呼ばれるボランティアの家庭で暮らす。この時、愛情に包まれ家族の一員として過ごすことで人間を深く信頼するようになるという。賢さだけではない、愛情がつくる何かがあるのであろう。そうした犬たちが訓練を重ね、選ばれたものだけが盲導犬となる。そして、わずか10歳（人間に例えれば60歳ほど）で引退していくというが盲導犬ユーザーにとっては離れ難い存在であろうし、幼い時に育てたパピーウォーカーの方々も、その別れの辛さは想像に難くない。

出会いと別れは、生きとし生けるものの定めとはいえ切ないものである。私が、時々帰省し、上京する際には愛おしい2匹のチワワたちすら泣いて別れを惜しんでくれる（ただ吠えているだけという人は多いが…）。愛情とは、人や物を心から大切に思う温かい気持ち。慈しみの心という。その慈しみとは、我が子への深い慈しみなど対象となる相手を想う心を表現した言葉である。

あれから、もう9年。巨大地震の後、多くの家屋と人のみ込んだ津波、2011年3月11日の東日本大震災。2年前に被災地を訪れた。復興に向けた取り組みの傍らで、愛する家族を失い、決して忘れることのできない多くの悲しみを抱えながら、懸命に明日に向かって生きようとしている姿をいくつも目にしたが、それは今も変わらないだろう。

「あの時このまちで何が起きたのか。そのとき人は何を思ったのか。そしてそこから沢山の絆や希望が生まれたことを私たちは忘れてはなりません。」東松島市の震災復興伝承館のリーフレットを今も持っている。大災害の中で命をつなぐことができた人も、尊い命を失った人たちも、きっと互いを想っているはずである。

震災以降、復興に向け、みんなを励まし、勇気づける多くの歌がつけられた。その中の一つに、「明けない夜はないから」という歌がある。その歌詞の中に、「・微笑むだけでつながれる気持ちと気持ち、手を結びゆっくりと立ち上がる、うつむいた顔あげてふみだすよ、一歩ずつ一歩ずつすすむために、明けない夜はないから」

私たちは、決して忘れない、何年たっても。そして今なお起きている自然災害の尊い教訓としても…。

もう一つの3.11、それは金属労協2020年春季生活改善闘争の集中回答日。不透明な国際情勢の中で新型コロナウイルス感染拡大の影響も加わって、足もとの状況はかつてない厳しい状況におかれている。しかし、先行き不透明感が増している今だからこそ、現況を打破していくために、その原動力となる職場の思いに到る解を導き出さなければならない。ものづくり産業の持続的発展のためには、多様な要因があることは承知している。しかし、過去を振り返れば、なによりも第一線で働く仲間の熱い思いが明日をつくってきたということを忘れてはならない。

そうした思いのこもったメッセージの発信が、後に続く中小、業種別の後押しともなり、日本経済全体を好循環に導き、被災地の復興にもつながる。

A P20 春季取り組みもいよいよ山場。納得のいく解を導き出すためにも安全と健康は欠かせない。第一線の仲間への激励の“ご安全に”の声掛けと、新型コロナウイルス感染拡大の阻止に向け、マスクの着用、うがい・手洗い・手指の消毒を励行し、来たる時に備えよう。

論議を尽くし、労・使互いのもう一踏ん張りが朝の扉を開くはずである。明けない夜はない。

ご安全に

2020年3月1日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一